

図版2 調査状況及び遺物出土状況



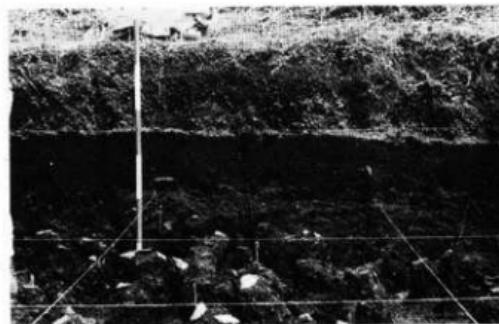
△2号址の調査 手前3号址



△2号址内の遺物出土状況



▽2号址北側土堤断面



I層 表土層

II層 スコリア層

III層 黒土層

IV層 ボラ混入土層  
(土器包含)

VI 平松地下式古墳発掘調査（昭54-1号）

えびの市大字島内字平松1135

—— 島内地下式古墳群 ——

県埋蔵文化財調査員 北郷泰道

## 本文目次

I 序 説	110
1 はじめ	110
2 島内地下式古墳群の地下式古墳分布圏における位置	110
II 平松地下式古墳昭54-1号の発掘調査	118
1 所在地	118
2 発掘調査に至る経過	113
3 発掘調査の結果	113
4 小 結	117
III 島内地下式古墳群の研究	119
1 島内地下式古墳群の地下式古墳——発掘調査小史——	119
2 遺構と副葬品の比較——編年の問題——	121
3 小 結	123
IV 結 語	124

## 挿 図 目 次

第1図 地下式古墳の分布図と地域図	110
第2図 えびの市所在の地下式古墳群	112
第3図 平松地下式古墳位置図	113
第4図 平松地下式古墳昭54-1号実測図	114
第5図 平松地下式古墳昭54-1号出土副葬品実測図(奥壁より)	116
第6図 平松地下式古墳昭54-1号出土副葬品実測図(入口より)	118
第7図 真幸・島内地下式古墳実測図	121
第8図 西都原地下式4号短甲金具	122
第9図 真幸・島内地下式古墳出土三角板鋸留短甲	122

## 表 目 次

第1表	えびの市所在の地下式古墳群	111
第2表	県指定古墳一覧	117
第3表	島内地下式古墳群発掘調査一覧表	120
第4表	鉄鎌形式と組み合わせ	122

## 図 版 目 次

図版1	(1) 発掘前の近景	127
	(2) 発掘後の近景	127
図版2	上. 閉塞の状態	128
	下. 羨道と玄室	128
図版3	(1) 2号人骨と副葬品の状態	129
	(2) 1号人骨と副葬品の状態	129
図版4	平松地下式古墳昭54-1号副葬品	130

# I 序 説

## 1 はじめに

昭和54年4月、えびの市大字島内所在の地下式古墳1基を発掘調査したのをはじめに、同年9月同地で新たに発見された3基の地下式古墳を発掘調査し、合計4基についてその成果の報告の責を負うことになった。ここでは4月調査分の地下式古墳の発掘調査報告を行ない、9月調査分の3基については本報告書中に別項をもうけ、そこにおいてその報告を行なう。しかし、同地は古くから地下式古墳の群集地として知られており、出土副葬品の把握されているもの、あるいはすでに発掘調査を経ている地下式古墳も12基を数えるに及び、現時点での「島内地下式古墳群」を<群>として把握する必要も出てきていることから、上記の発掘調査報告にあわせて島内所在の地下式古墳を<群>として総括し、今後なお継続して発見されるであろう同地の地下式古墳に対処すべき一資料を供することになった。

ここで「島内地下式古墳群」と呼ぶのは、平松・杉ノ原の二字を含む大字島内所在の地下式古墳の総体についてである。この地の地下式古墳は後の第Ⅲ章1で述べるよう、昭和8年に「真幸村古墳」という名称で県の指定を受けているのをはじめに、この地を調査した報告者それぞれによって「島之内地下式横穴」「平松地下式横穴（あるいは地下式古墳）」「杉ノ原地下式横穴（あるいは地下式古墳）」など様々に呼称されている。ここでは、新たな混乱を避ける意味から、旧来のそうした呼称も尊重しつつ、各々の地下式古墳を呼ぶ時は平松・杉ノ原の小字名に従い、平松・杉ノ原を含む全体を呼ぶ時は大字名である島内で総称することにした。

## 2 島内地下式古墳群の地下式古墳分布図における位置

周知の如く、地下式古墳の分布は西都原以南の地域に限られるという特異な性格をもっている。しかし、この古墳時代の特異な墓制の全体像はいまだ明らかにされているとは言い難く、なお今後の資料の蓄積とその解析にまつところが大きい。

西都原を北限に、大隅半島串良付近を南限に、鹿児島県大口付近を西限とする地下式古墳の分布図は、さらに細かくは5つの地域に分けることができる。

西都原・国富・宮崎市下北方を中心とする第1地域（同1）、小林・野尻を中心とする第2地域（同2）、えびの・大口を中心とする第3地域（同3）、都城を中心とする第4地域（同4）、大隅半島の第5地域（同5）の5つである。

第1・第5地域はいわば日向灘沿岸部の平野部で、第2・第3・第4地域は小林・野尻盆地、加久藤・大口盆地、都城盆地といった内陸部の盆地を中心とした地域である。



第1図 地下式古墳の分布図と地域図

これらの地域は地下式古墳の内部構造に、それぞれの異なる性格を示している。第1・第4・第5地域は、5世紀後半から6世紀初頭にかけて「妻入型」の構造をもち、第2・第3地域では、第2地域の大秋地下式古墳群の内に数基の「玄入型」の構造をみるもの、第3地域では今までそうした構造の地下式古墳はみうけられない。これらの地域では、もっぱら「平入型」の構造を採用している。さらにこれらの地域は墳壇上部を板石によって閉塞するという特有な構造を持つ点でも共通している。こうした大きな構造上の傾向はさらにそれぞれの地域の個性で彩られ、5つの地域の<地域性>の基底がそこに現われる。第4地域の地下式古墳は第1地域と同様「妻入型」ではあるが、それ程の長大な玄室を持つことがなく、第5地域では「妻入型」の玄室に軽石製の石棺を設置するものが現われる。一方、第3地域では一部地下式板石積石室と分布が重なり、第2地域ではそれを見ることができない。

第1・第4・第5地域と「妻入型」の流れで違うことの出来る、海上あるいは大淀川支流の南流の系路を<道>として把握することが出来れば、6世紀前半期以降にこれらの地域にも出現する「平入型」の流れを第3・第2地域との関係でとらえ、内陸部あるいは大淀川支流の北流の系路も、またもう一つの<道>として把握出来る筈であるし、これらを後の『延喜式』等にみることの出来る「日向」を分岐とする二つの「古道」として理解することも出来る筈である。

しかし、こうした分布図あるいは地域圖、又は<道>の問題は、それら地下式古墳の内部構造と共に副葬品の検討も加え、そこに突出された<地域性>が古代社会の中でどのような意味を持つのかの解明と同時的にお多く検討を必要としている。

さて、島内地下式古墳群は先の第3地域に属している。ここではえびの市所在の地下式古墳に限り、鹿児島県側の大口方面の地下式古墳については触れないが、概略的に第3地域内での当該地下式古墳群の位置について触れておきたいと思う。

(1)  
えびの市では、ここに取り上げる島内地下式古墳群(第2図5)のほか、小木原地下式古墳群(同1)、  
(2)久見追地下式古墳群(同2)、馬頭地下式古墳群(同3)、灰塚地下式古墳群(同4)などが知られている。又、正式な発掘調査は経ていないが、地元の木崎原操氏によって確認された「門田古墳群」(同6)、「芋畑古墳群」(同7)、「建山古墳群」(同8)などがある。門田においては地下式板石積石室、芋畑においては玄室を朱塗りしていたものがあったとされるが、その詳細については不明である。

さて、小木原・馬頭・久見追の三地下式古墳群は互いに近接した地理的位置関係にあるが、木崎原氏の話によれば、過去それぞれの地区を結ぶ地点が砂利採取等により撤削された事があるが、その地点か

地図番号	名 称	座標基準	緯 度	主 な 漢 字 号	脚 考	文 献
1 小木原	5 基	東北上郡板石町本字 鹿門郡鹿園字1基		1号から鹿頭郡鹿園字中、馬頭、青、鹿、白石、鹿頭郡鹿園字などと記載より付上。		註(1)
2 久見追	10 基	東・門・鹿・那・鹿		3号から蛇行町、6号から青、鹿など。地脈鑑、麻刀、劍など。		註(2)
3 馬 頭	14 基	"		1号から馬頭、2号から青、鹿、3号から蛇行町、鹿、4号から鹿など。地脈鑑、劍など。		註(3)
4 芋 畑	19 基	東北上郡板石町明高 鹿頭郡板石町明高4基		1号から鉢、3号から鶴見太郎、17号から鉢など。地脈鑑、青、鹿など。	地下式板石積石室を含む	註(4)
5 島 内	12 基	鹿頭郡板石町明高7基 鹿頭郡板石町明高4基		第3表 参照		第3表参照

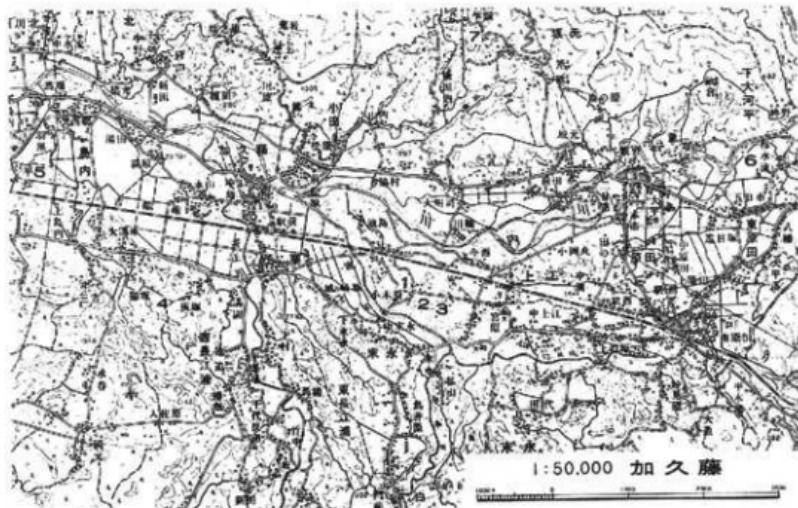
第1表 えびの市所在の地下式古墳群

らは地下式古墳の出土がみられなかったといい、地理的に近接しながらもそれらは相互に独立した集団性をもっていたとみられる。又、馬頭・久見迫は九州縦貫道の事前調査として発掘されたが、その後縦貫道工事中も同地に足を向けられた木崎原氏によれば、同地より新たに地下式古墳が出土した例はなく、路線外に平面的に拡がる可能性は今後もあるとしても、路線内において確認された基数はまず<群>構成の単位数であるとみてよい。

一方、島内地下式古墳群は少なくとも既調査分に加え、県指定分、あるいは砂利採取時に破壊されたものなどを数えると実に50基の多さを数えるに到る。又、小木原地下式古墳群においては、木崎原氏の記録によれば280基に近い地下式古墳を数えるに到る。しかし、この280基という多くの地下式古墳がどのような<群構成>の中にあったものであるのか資料不足である。

(6) いずれにしても、六野原古墳群中の地下式古墳の分布にしても<群構成>としては、小字の狐平・桃木畠と吹上・六野原に二分されることは明らかであり、地下式古墳の<群構成>もグルーピングの中で把握される必要がある。しかし、そのためには未だ資料不足といえ、グルーピングの可能な地下式古墳群は六野原地下式古墳群、大萩地下式古墳群に限られる。

さて、島内地下式古墳群はこれらえびの市所在の地下式古墳群の内現在のところ最も西方に位置し、川内川の南方にある標高280mの台地上に位置している。立地としては小木原・久見迫・馬頭と共に遙しており北側に一段低位となる水田を見おろすことが出来る。この地で同時期の集落跡が確認される事が待ち望まれるところである。



第2図 えびの市所在の地下式古墳群

- |       |       |      |      |
|-------|-------|------|------|
| 1 小木原 | 2 久見迫 | 3 馬頭 | 4 灰塚 |
| 5 島内  | 6 門田  | 7 烟  | 8 建山 |

## II 平松地下式古墳昭54-1号の発掘調査

### 1. 所在地（第3図）

平松は先述の如く、えびの市大字島内に属する。今回昭54-1号と称することになった地下式古墳は、同地1,135番地にあり、地番まで明示することの出来る地下式古墳はこれで、9月調査分の3基、そして昭和52年岩永哲夫氏の調査された1基をあわせ5基の地下式古墳が同番地より出土したことになる。

本地下式古墳は昭和10年、瀬之口伝九郎氏の調査された鉄塔下の地下式古墳のほぼ西方100mの位置に位置し、後に調査することになった昭54-1

8・4号は本地下式古墳の北西の方向約130m、昭54-2号は南東の方向約50mに位置している。

この付近の地層は、上層が黒色崩壊土層で、その下にアカホヤ（第1オレンジ）、その下に黒褐色・黄褐色のローム層があり、さらに下層は砂礫層となる。従ってこの地の地下式古墳は、おおむね砂礫層を掘り下げた形で床面とし、天井部はアカホヤ層に掘り込まれた形となっている。

### 2. 発掘調査に至る経過

えびの市教育委員会より県教育庁文化課に、吉留哲郎氏（えびの市大字湯田92-6番地）所有の畠地において地面が陥没し、地下式古墳らしいとの連絡があり、昭和54年4月3日筆者が同地におもむき、えびの市教育委員会社会教育課職員の方々の援助のもと、発掘調査を担当した。その際、北面の方向約130mの地点において堅土上部板石閉室の地下式古墳の蓋石を発見したが、まだ崩壊の恐れのないこと、時間的制約などから、その地下式古墳の発掘は行なわないでいた。これが9月6日～8日まで調査することになった3基の地下式古墳の内の1基昭54-4号と称すことになった地下式古墳である。なお、昭54-1号はえびの市教育委員会が調査主体者となり、実施されたものである。

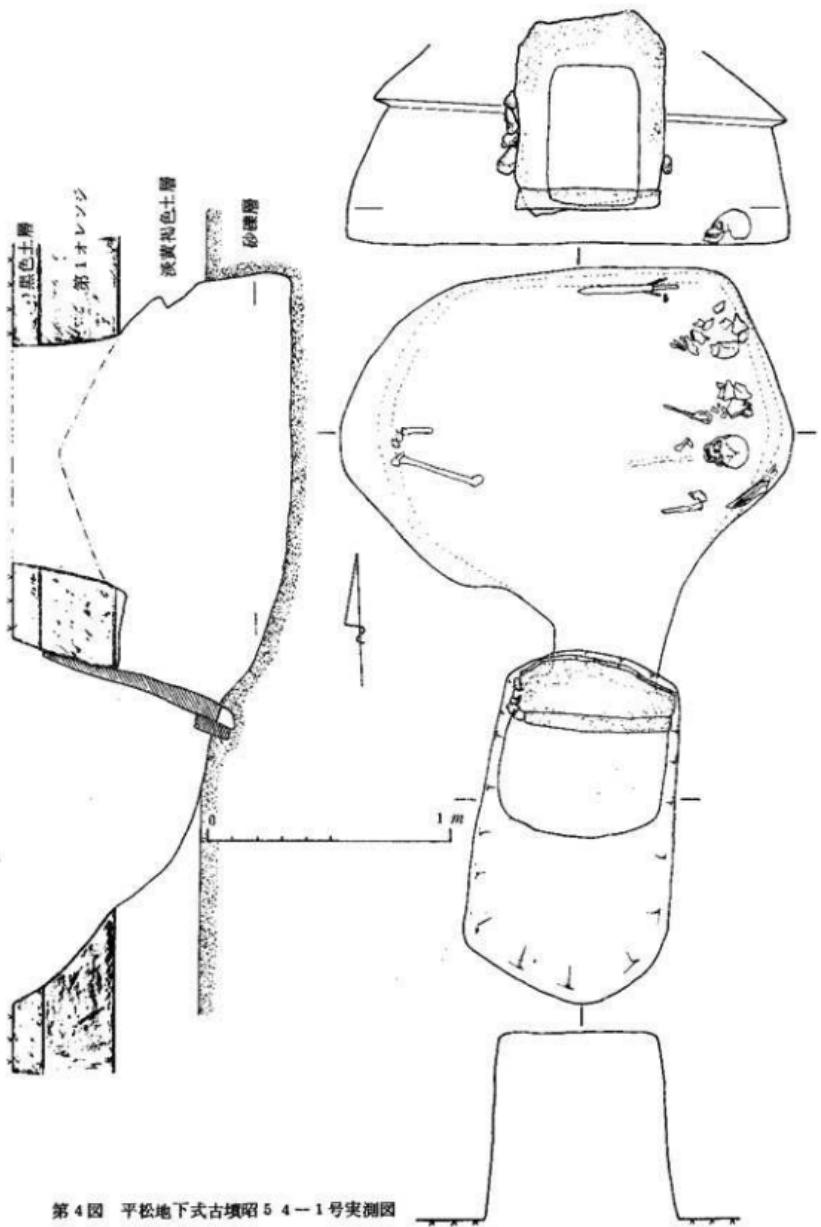
### 3. 発掘調査の結果

本地下式古墳は天井部が陥没していたため、天井部を開口して発掘調査することにしたが、陥没穴からの狭門部の観察によって狭門部を板石によって閉塞するタイプの地下式古墳であることが確認されたため、同時に堅壁入口の検出も進めた。

地下式古墳の玄室の構造は、楕円形をもつ平入型寄棟造りであり、この地域の例外にもれず、床面は砂礫層中に築かれているため、床面付近の壁面は崩壊しており、原形をそのまま保っているとはいい難い。しかし、床面プランはいわゆる長方形ではなく楕円形のプランである。



第3図 平松地下式古墳位置図  
(番号は第3表に対応する)



第4図 平松地下式古墳昭54-1号実測図

地下式古墳の主軸はほぼ南北にあり、玄室の長軸  $185\text{cm}$ 、短軸  $131\text{cm}$ で天井の高さは陥没のため不明であるが、柵状施設までの高さは奥壁より  $49\text{cm}$ である。また、西側の袖ははっきりと掘り込まれているが、東側の袖はややルーズなものとなる両袖式のタイプである。

閉塞方法は羨門部板石閉塞で、約  $60 \times 80\text{cm}$  の大きな板石で羨門を閉塞し、その下部に横石として幅  $55\text{cm}$ 、高さ  $10\text{cm}$  の長い石を用い、閉塞の隙間に手大の河原石を益め物として用いている。

堅壁は縦に長い隅丸長方形で、長軸  $145\text{cm}$ 、最大幅  $83\text{cm}$ 、最小幅  $69\text{cm}$ を計る。堅壁はほぼ  $50^\circ$  前後の傾斜で掘り込まれ、閉塞石を境に一段低くなり玄室の床面に至る。

埋葬されていた人骨は2体である可能性が強い。玄室入口に近い人骨ははっきりとしており、頭蓋骨にはベンガラが塗られていた。奥壁よりの人骨は、天井部陥没の際のショックにより、1体の頭蓋骨が粉砕したものであるか、あるいは2体の人骨があったのか、崩壊上除去後の床面の清浄でもはっきりとは確かめることができなかった。ともあれ2体～3体の複数券である。

副葬品は奥壁に添い剣1振、鉄鎌3本が一箇所にまとめられており、入口付近の人骨頭部の上方に短刀2振、鉄鎌4本が同じくまとめて副葬されていた。

## 遺 物

以下、(1)(2)は奥壁に添い副葬されていたものである。

### (1) 剣(第5図)

全長  $416\text{cm}$ 、柄長  $113\text{cm}$ を計る。身幅は開寄りで  $38\text{cm}$ 、鋒寄りで  $26\text{cm}$ で厚さは身中程で  $0.6\text{cm}$ 、鍔は通っていない。

柄元装具には鹿角装が用いられており、いわゆる直弧文等の有無は表面の別離により確認はされなかった。明瞭にとらえることの出来る目釘穴は、柄元より一箇所である。又、柄頭装具は発見されなかつたが、装具の具備したらしい剥離面を柄頭に見ることが出来る。

### (2) 鉄鎌(第5図2～4)

2は現長で  $179\text{cm}$ を計り、矢柄部までの長さは  $102\text{cm}$ である。最大幅  $3\text{cm}$ 、厚さ  $0.3\text{cm}$ を計る。矢柄の径は  $1.1\text{cm}$ である。

3はやや細身で長二等辺三角形状で、現長  $154\text{cm}$ 、矢柄部までの長さ  $91\text{cm}$ である。最大幅  $2.6\text{cm}$ 、厚さ  $0.4\text{cm}$ を計る。

4は現長で  $165\text{cm}$ 、矢柄部までの長さ  $115\text{cm}$ である。最大幅  $3.6\text{cm}$ を計り、茎部に向けてやや強い屈曲をもつ。矢柄の径は  $1.0\text{cm}$ である。

以上、いわゆる変形主頭斧箭式に属するタイプである。

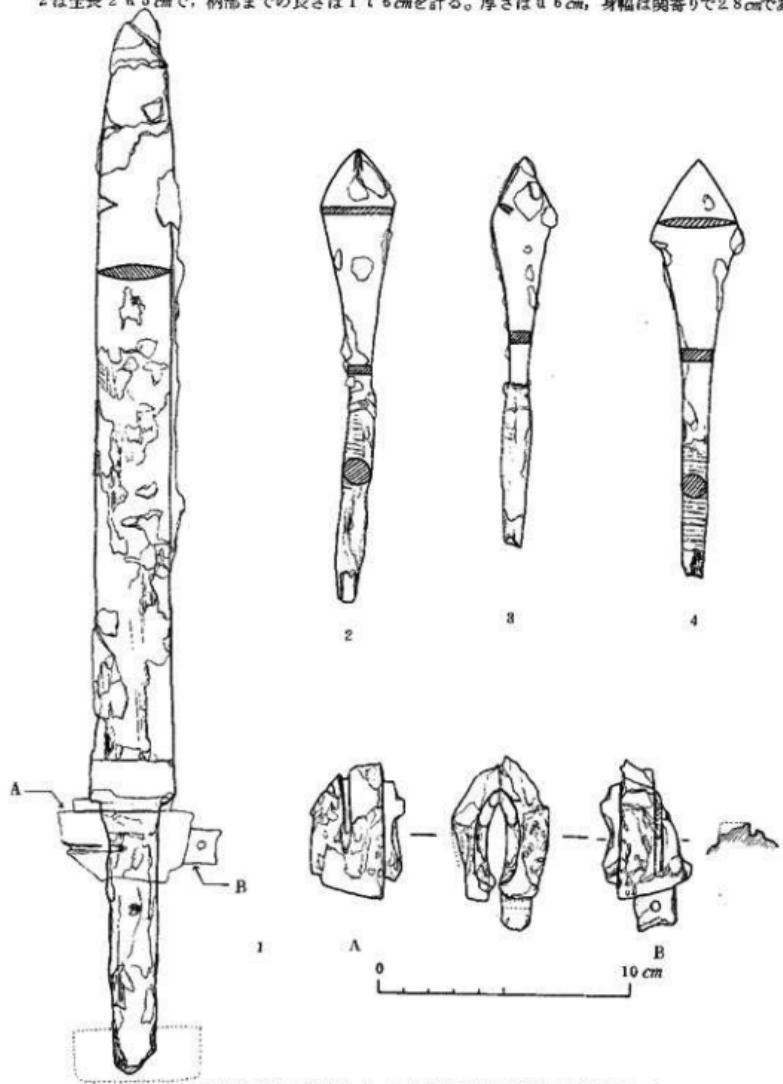
以下、(3)(4)は玄室入口寄りに副葬されていたものである。

### (3) 短刀(第6図1・2)

1は全長  $278\text{cm}$ で、柄部までの長さは  $183\text{cm}$ を計る。厚さは  $0.6\text{cm}$ 、身幅は開寄りで  $2.3\text{cm}$

である。目釘穴は二箇所あり、刀身はやや反りをもっている。

2は全長26.5cmで、柄部までの長さは17.6cmを計る。厚さは0.6cm、身幅は関寄りで2.8cmである。



第5図 平松地下式古墳昭54-1号出土調査品実測図(奥壁より)

刀身には反りは見られず、柄には鹿角を用いている。鹿角柄の柄頭付近には長楕円状のくり抜きがあり、何らかの柄頭装具がそなわっていたと思われる。

#### (4) 鉄鎌(第6図3~6)

3はやや小型の変形主頭斧箭式の鎌である。現長で9.9cm、矢柄部分までの長さは7.8cmを計る。厚さは最大幅部で0.4cm、そして最大幅は2.9cmである。

4は柳葉式の鉄鎌で、現長10.0cm、矢柄部分までの長さ7.5cmを計る。矢柄部に近い茎の厚さは0.5cmである。

5・6は片刃箭式のもので、5は現長17.6cmを計り、矢柄部分までの長さは14.5cmである。厚さは刃部中央で0.3cm、茎部中央での幅は0.5cm、厚さも0.5cmである。

### 4. 小 結

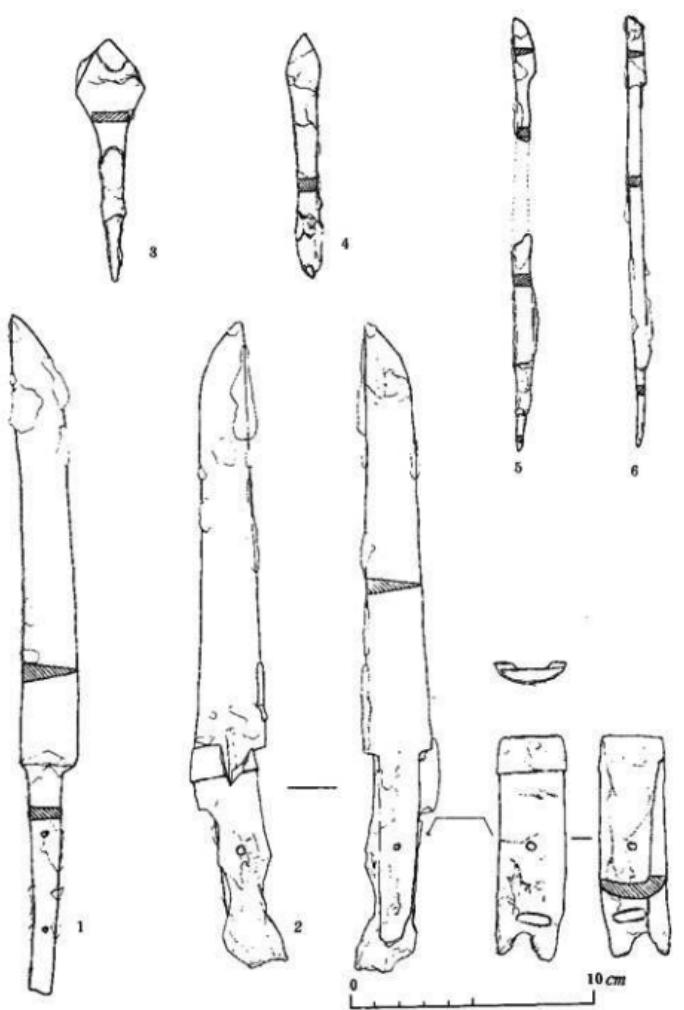
2体~3体葬られた人骨が、時期差をもつものであるのか、つまりは複数葬としてとらえられるものであるのかの判断の寄り所は、とりあえず鉄鎌に示されたタイプ差に認めるしかない。奥壁よりに副葬された鉄鎌は平根鎌(変形主頭斧箭式)で占められていたが、玄室入口寄りに副葬された鉄鎌には尖根鎌(片刃箭式)が混じ、他の平根鎌も小型化したものであった。こうした鉄鎌のタイプ差にわずかであれ時期差の反影を認めることができれば、細分化された地下式古墳の編年には役立てることが出来る筈である。次章において鉄鎌のタイプとそのセット(組み合せ)関係については、若干触れる事になろうと思うが、タイプとセットによって一応の傾向をつかむ事が出来る筈であるし、又編年には使用することも可能である。しかし、その作業をするためにはまだ資料不足である。

ともあれ、本地下式古墳は追葬があったと判断できるし、玄室入口部に副葬された反りを持つ短刀も、鉄鎌とあわせて編年上の資料となろう。

第2表 県指定古墳一覧(昭和8年12月5日)

名 称	大 字	字	地 番	地 目	地 築	義 葬	所
真幸村古墳	鳥 内	杉 原	1,431	山 林	300	地下式 横穴	中 謙 遊龟安
"	"	"	1,184/2	"	4108	"	阿 野 二 ワ
"	"	"	1,194/2	"	3119	"	加久留村
"	"	平 松	1,201ノチ	山 林	1600	"	崎 泰 藏 古
"	"	"	1,201ノ8	"	520	"	日 高 留 古
"	"	"	1,184/2	"	4108	"	加久留村
"	"	"	1,201ノリ	"	220	"	阿 野 二 ワ
"	"	"	1,201ノリ	"	220	"	加久留村
"	"	杉 原	1,436/号	墓	2026	"	"
"	"	"	1,435/2号	山 林	3012	"	福戸山 清 產
"	"	平 松	1,201ノ2	"	7102	"	鹿児島県教育委員会 木崎 新之助
"	"	"	1,201ノ2	"	7102	"	"

この表は『日向遺跡調査報告書』第1輯宮崎県教育委員会(昭和27年)による。



第6図 平松地下式古墳昭54-1号出土副葬品実測図（入口より）

### III 島内地下式古墳群の研究

#### 1. 島内地下式古墳群の地下式古墳——発掘調査小史——

島内地下式古墳群が公けに、人々の認識の対象となったのは、昭和8年であったといえる。この年、<sup>00</sup>1・2基の地下式古墳が「真幸村古墳」の名で指定されている。指定された地下式古墳は標柱が立てられ、その保存に資されたというが、その後標柱は抜き去られ、今はその明確な所在地もあやふやとなっている。『日向遺跡調査報告書』第一編ではそれぞれの指定地下式古墳の所有者まで追跡調査されており、同書発行の昭和27年頃までは何とか保存の施策がこうじられていたものと思われる（第2表参照）。

記録として残された発掘調査は、昭和10年の瀬之口伝九郎氏にはじまる。瀬之口伝九郎調査の記録は真幸村役場の「調書」として残されており、昭和42年栗原文藏氏の報告文中に「調書」と「発掘物」の写真が掲載され、あるいは木崎原操氏によって『えびの』第5号においても詳しくその調査の経緯や「調書」も活字化されており、その詳細をうかがい知ることが出来る。この時の出土遺物は、先の栗原氏報告文中に掲載された写真によれば、D字形の臂膀板や辻金具などの馬具類が出土している。鐵鏃は多數出土しているようであるが、茎の長い尖根鏃が主となっている。他に劍、刀子が出土している。

その後30年余り、この島内における地下式古墳の発掘調査は断ち切れとなる。その間、文献としては「東京国立博物館収蔵品目録」の中に杉原・石坂出土として横矧板新留短甲、小札紙留衝角付舟が記載されているのが見える。しかし、その出土の経過等は定かではない。

昭和41年、栗原文藏氏調査の地下式古墳は、堅壙入口が正方形に近い方形を呈したもので、この地域の地下式古墳の中でも特異な形状で知られる。又、出土した副葬品にも見るべきものがあり、三角板新留短甲、そして栗原氏によると「皮小板漆塗草摺の漆膜の残存したものと推定される」ものがあり、この地の代表的な地下式古墳の一つに数えることが出来る。

その後、石川恒太郎氏によって合計4基の地下式古墳が調査されている。昭和43年に調査された2基は共に副葬品が貧弱化しているが、同年第1号は深門部を粘土塊で閉塞したものとされ、父奥壁部を傾めに掘り込み追葬の方法などにも興味ある問題をなげかける地下式古墳である。

昭和46年、この島内地下式古墳群に一つの危機が訪れている。同台地北端が砂利採取業者により乱掘されはじめたのである。木崎原氏によれば、この時27基の地下式古墳が破壊されている。同年に石川恒太郎氏によって調査された2基は、この27基の内に入る。

岩永哲夫氏によって調査された昭和52年の地下式古墳は、堅壙上部板石閉室のタイプのものではあるが、淡道といえる部位を欠くもので、形状としてはやはり特異なタイプの一つと考えられる。父、副葬品には大型の変形半頭斧箭筒式タイプの鐵鏃があり、この大型の平根鏃は注目される遺物である。

昭和54年、筆者が4基の地下式古墳の発掘調査を同地で行なうことになったが、昭和54-2号と称した地下式古墳からは南九州では初めてといえる金銅製の軸（あるいは胡蘿）金具と思われるものが出土し注目される。

以下、同地の地下式古墳を示す時は、第8表における番号に従い表記することにする。

番号	所 在 地	副 伴 品	形 式	埋 置 - 取 実	被 考	調 月	査 日	文	載
1	大字島内字原	鐵製板紙箱1具、小札、鉛筆、角 付骨、刀、鍬頭、石斧	不 明	不 明	不 明	昭 1.6	明	東京国立博物館「東京國立博物館収藏品目録」(1966)	
2	# # 1,436/2号	骨瓶、金具、刀子	新門巖板石頭器、平入り 新門巖形ラン	南~北 3 体	昭 1.6 6.18 真多木村良輔報告による(注)			瀬之口に九郎御前 真多木村良輔報告による(注)	
3	# #	三脚鐵燈籠、劍 2、鏡 刀子、齊、鎧鏡 6	新門巖板石頭器、平入り 新門巖形ラン、鎧鏡	南~北 1 体	昭 4.1 8.10~8.11 新文化財調査報告書第12号 新文化財調査報告書第12号			新文化財「えびの町出土品(新潟県)」(1966)	
4	# 字平地 (昭和43年度地下式第1号)	劍、刀子 2、鎧鏡 1.8	新門巖板石頭器、平入り 新門巖長方形ラン	西~東 2 体	昭 4.3 6.16 石川恵太郎「えびの町出土品(新潟県)」(1969)			石川恵太郎「えびの町出土品(新潟県)」(1969)	
5	(同 地下式第2号)	刀子 3、劍片	新門巖上部鐵石頭器、平入り 新門巖形ラン	南東~北西 1 体	"				
6	(昭和46年前地下式第1号)	な し	新門巖上部鐵石頭器、切妻 新門巖長方形ラン	南~北	昭 4.6 6.16 石川恵太郎「えびの町出土品(新潟県)」(1969)			石川恵太郎「えびの町出土品(新潟県)」(1969)	
7	(同 地下式第2号)	刀子 3、鎧鏡 4	"	中西~北東 3~4体	"				
8	# # 1.1.3.5	劍、鎧鏡 1.1	新門巖上部鐵石頭器、平入り 新門巖形ラン、鎧鏡	南~北 1 体	昭 6.2 1.1.4 岩永清夫「半島地帯出土遺物発掘調査」「宮崎文化財調査報告書第20号(1978)				
9	(昭64-1号)	劍、劍刀 2、鎧鏡 7	新門巖板石頭器、平入り 新門巖形ラン	南~北 2~3体	昭 5.4 4.3 "				
10	(昭64-2号)	劍 1.1.3.5~2.10 鎧鏡 6、鎧鏡 1.6、鎧鏡 1.7 金具 5、金鏡 5(鎧金具)	新門巖板石頭器、平入り 新門巖形ラン、鎧鏡 新門巖板石頭器、平入り 新門巖形ラン、鎧鏡	南~北 2 体	昭 6.4 9.8~9.8 北郷善通・岩永清夫「半島地帯出土遺物発掘調査」「宮崎文化財調査報告書第22号(1980)				
11	(昭64-3号)	劍 1.1.3.5~2.6.9 鎧 鎧鏡 6	新門巖板石頭器、平入り 新門巖形ラン	北東~南西 3 体	"				
12	(昭64-4号)	鎧鏡 2	"	北西~南東 2 体	"				

-120-

第3表 市内地下式占墳群発掘調査一覧表(所在地の項で( )書きした番号は報告書中に用いられているものである。)

(注)木崎原保「平松古墳跡について」『えびの』第5号(1984年)4ページ、および番号3の文献に「調書」の写真が掲載されている。

## 2. 遺構と副葬品の比較——編年の問題——

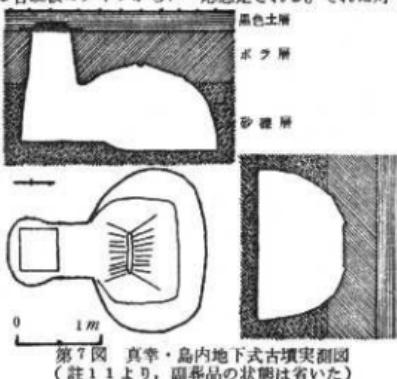
えびの市の地下式古墳には、堅壙上部板石閉塞のタイプと済門部板石（あるいは河原石・粘土塊をもちいるものもある）閉塞のタイプという二つの地下式古墳があり、さらに、地下式板石積石室というこれも個有な墓制が混在してある。第1表「えびの市所在の地下式古墳群」と第3表「島内地下式古墳群発掘調査一覧表」を通観して知られることは、概して堅壙上部閉塞のものに対し済門部閉塞の地下式古墳の方が豊富な副葬品を所有しているということである。現在の発掘成績による限り、二つのタイプが混在して知られるのは小木原と島内の二群で、久見迫・馬頭は済門部閉塞の単一タイプに占められており、灰塚は逆に堅壙上部閉塞の単一タイプによって占められている。そして、灰塚では2基から鉢、1基から環頭太刀を出土し注目される他は、剣や鐵鎌が極めて限られた数量で副葬されているに過ぎない。一方、久見迫・馬頭では、各々の内に1基蛇行剣を副葬しており、脛・鎧など馬具類がかなり豊富に副葬されている他馬頭では馬蹄の出土をみている。この副葬品にみる対照的な差異は象徴的なことのように思われる。

しかし、今一つ興味ある象徴的な副葬品のあり方は、上記3群からは甲冑類が出土していないのに對し、小木原・島内という堅壙上部閉塞と済門部閉塞のタイプの混在する群においてそれが出土しているということであり、小木原では済門部閉塞のタイプより、島内では堅壙上部閉塞のタイプより甲冑類が出土していることである。

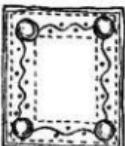
こうした群間におけるタイプ差と副葬品差の問題は、果して<群>として一応完結した基數に既調査の成果が到っているのか否かが未だ未確定である現在、その早計な判断は危険すぎるかもしれない。しかし、資料整理の一過程の中で先述の如き傾向が看取されることには違いない。今はそうした作業的的前提に立ち、いま一つ考察を進めてみようと思う。

馬頭地下式古墳群は小木原地下式古墳群に比し、相対的に一時期下がる時代の所産であることは、共通の副葬品である馬頭、脛鎧板などからうかがい知ることが出来る。又、久見迫は馬頭とほぼ同時期の所産であることが、やはり共通の副葬品である脛鎧板のタイプから、一応想定される。それに対し灰塚出土の遺物には明確に年代観を想定し得る共通の遺物がない。ただ、灰塚からは二段逆制のある柳葉形の鐵鎌が比較的多く出土している。このタイプの鐵鎌の保有数では旭台に上回り、地下式古墳分布圖内では最も多いとさえいえる。この二段逆制のある柳葉形の鐵鎌は島内の本報告書別項にある昭54-8号からも出土している。この地下式古墳もまた堅壙上部閉塞のタイプであった。

こうしてそれぞれの群を共通の副葬品により並列あるいは先後関係の中に一応置くことは出来るしかし、そのことはまだ地下式古墳の構造上のタイプ差の編年には行きついていない。



第7図 真幸・島内地下式古墳実測図  
(註11より、副葬品の状態は省いた)



第8図 西都原地下式4号  
短甲金具(洗山謹定提供)

次に島内地下式古墳群の中でそうした関係をみてみたい。島内においても総体的には堅壁上部閉塞に対し美門閉塞のものの方が豊富な副葬品を所有している。ただ、大きな例外が第3表-3号の地下式古墳である。少なくともこの地下式古墳は出土した三角板鉄留短甲(第9図)から5世紀後半~6世紀初頭に位置付けが出来る。一方、第3表-10号(昭54-2号)は美門閉塞のタイプであるが、出土した金銅製金具(劍あるいは胡籠金具)から同じく5世紀後半~6世紀初頭の時期に位置付けられる。

この金銅製金具は、タガネ彫により波状列点文を施したもので、同様の波状列点文を施したものとしては西都原地下式古墳4号出土の横矧板革縫短甲の開閉金具(第8図)があり、又全国的にも余り類例のない劍あるいは胡籠金具ではあるが、その全国的な出土例から5世紀後半~6世紀初頭に限られた遺物であることが知られている。

第3表地下式古墳分 鉄鎌形式	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
異形脇抜柳葉式(二段逆刺)										○		
笠被両丸抜脇柳葉式										○		
変形走頭斧箭式	○				○	○	○	○	○	○		
主頭広根斧箭式								○		○		
片刃箭式								○	○			
柳葉式					○							

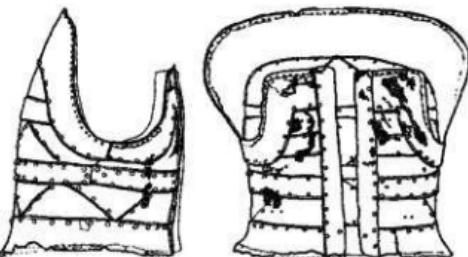
第4表 鉄鎌形式と組み合わせ

第4表はとりあえず概略的に、後藤守一氏の名称に従い鉄鎌のタイプとその同一地下式古墳に副葬された、いわば各タイプの組み合わせを表化したものである。ただし、不明瞭なものもあり完全にすべてを表化しているわけではない。まず、変形主頭斧箭式の鉄鎌が最も多く、共通的なタイプとしてあることが知られる。中でも第3表-8号(昭52-1号)からは、すべて変形主頭斧箭式の鉄鎌が出土しており、11本中の1本は最大幅5.4cmの大型のものであり注目される。

概して、片刃箭式など尖根タイプの鉄鎌は比較的多數まとめて副葬され、異形脇抜柳葉式など特異な鉄鎌は1・2本がせいぜいである。こうした傾向はいわゆる一般的傾向に添うものである。しかし、第3表-4号のように他に類を見ない、大きく反りかえった逆刺をもつ片刃箭式のみが18本近く副葬される例もあり、興味ある資料である。

こうして副葬品を比較した時、現在の

さて、地下式古墳からはほとんどといつて良い鐵鎌が出土する。しかし、後藤守一氏の業績以来、鐵鎌に関する研究成果は鈍牛の如き歩みである。その中で、鐵鎌による地下式古墳の編年は極めて困難であるといえる。又、逆に言えばこれ程多數に地下式古墳から鐵鎌が出土しながら、まだまだ真に編年の基礎的資料として供するには絶対的な資料不足ともいえる。



第9図 真幸・島内地下式古墳出土三角板鉄留短甲(註15より)

<高4.8cm>

に地下式古墳<群>の間においても、<群>内部においても堅壙上部閉塞と羨門部閉塞の両タイプの間にはさほど時間的なひらきはないようと思われる。しかし、厳密には堅壙上部閉塞においては相対的に羨門部閉塞に対して尖根タイプの鉄轍の副葬が稀薄であり、鉄轍副葬の数量からいえば数の限られた副葬がなされており、それらのことが古墳文化通有の現象に見合うものであるとするならば、島内地下式古墳群内においても特異なタイプに属する三角板紙留短甲の副葬された第3表-3号の堅壙上部閉塞の地下式古墳を一つのエポックとして、前者のタイプは後者のタイプに対して先行する可能性をもつてゐると思われる。それはまた、地下式古墳を築造するという観点からいえば、径50cm程の堅壙入口を掘削し、さらに地下に玄室を造るという堅壙上部閉塞の作業的煩雑さに対し、広い堅壙入口を掘削する羨門部閉塞のタイプの方がより墓制の<進化>には見合っている。しかし、そのことは両者のタイプの地下式古墳を時期的に顕然として区画されたものとしてみるのではなく、一つの大きな規制としては墳丘の存在の有無の問題があり、墳丘下においては広い堅壙入口をもつ羨門部閉塞のタイプの方が、玄室に対して直角の角度をもつ堅壙上部閉塞のタイプに比しより道理にかなう形状であることが考えられ、両者のタイプ差は地下式古墳の社会内におけるヒエラルキー(階層組織)の問題までも考慮に入れ、時期差と同時に階層差の反映という観点から論究しうる可能性も残していると考えられる。

### 3. 小 結

島内地下式古墳群に限らず、えびの市に所在する地下式古墳群も、相当数の地下式古墳が確認されていながら正式な調査も既に消滅したの方方が正式な調査を経たものを圧倒的に上回っており、その意味において絶対的な資料不足という感をまぬがれ得ない。以上、推論を述べ今後の一つの叩き台として、可能性のある範囲にはその論を進めたつもりである。

えびの市を含む、ここでいう第3地域には、堅壙上部閉塞と羨門部閉塞という二つのタイプの地下式古墳があり、そして地下式板石積石室という分布図からいえばある意味対立的な墓制の三つの墓制が混在してある。しかし、地下式古墳に比し、第3地域に限らず地下式古墳そのものに対してても示唆的な地下式板石積石室の具体的な解析作業は未だ停頓しているといえる。地下式板石積石室に用いられる板石は第3地域に限らず第2地域(小林・野尻)にまで閉塞石として使用されており、具体的な連関性をもつている。私見によれば、西都・国富(第1地域)で発生した地下式古墳という墓制が、第3地域に至り地下式板石積石室との接触の中で板石による堅壙上部閉塞タイプの地下式古墳が生まれたとする灰塚遺跡で示された見解には基本的に了解し難い部分があり、地下式古墳発生論と編年論あるいは地域論は厳密に区別されるべきだと考えている。第1地域で地下式古墳が発生しそれが西漸あるいは南漸していくとするならば、最も手短かには第3地域島内・小木原、第5地域続川などから出土している甲冑類をどう時期的に位置付けていくのかという問題を厳密に判断していくべきであるし、地方に時間差を求めるならばその具体的な根拠を示す必要があろうと思う。現在のところ、私見によれば各地域を平行的な関係として置き、まず地域内における編年に一つの作業を傾注すべきだと考えている。

ともあれ、島内地下式古墳群の検証を通じて切実に感じられることは、そうした地域から全体に普及し、さらには再び地域に収斂されていく以上の諸問題である。

## IV 結 語

島内地下式古墳においては、資料の蓄積の不足からその「群構造」にまで考察を進めることは出来なかった。たとえば、困難な条件の中すぐれた分布図が作成された旭台地下式古墳群においては、その厳密な分布図から、一つの「群構造」を把握することができる。旭台では片袖形の地下式古墳にはすべて柱状あるいは桿木状の造り出しをもつか、ベンガラによる彩色（装飾）をもつかのいわゆる装飾をもち、両袖形のものは非装飾であった。そして、造り出しをもつ9号・11号は玄室方向をほぼ等しく南北に並列し、彩色をもつ7号・6号・12号も同様に玄室方向をほぼ等しく東西に並列するものであり、さらに12号・13号・2号・3号、4号・5号の各々2基はほぼ7m直径の円に中心をもち集合するものであることが知られる。<sup>22</sup> こうした現象は一つの地下式古墳群の規格的な「群構造」として理解される。

島内地下式古墳群における「群構造」はまた旭台とは若干ことなるものと思われる。第3表-11号・12号（昭54-3号・4号）は近接して築造された地下式古墳であったが、主軸方位も異なり、かといって一つの中心点に集合するわけでもない。島内において分布図化された地下式古墳はまだこの2基に過ぎず、これをして「群構造」の在り方を論ずる訳にはいかない。後は類別化と蓄積の中でその課題に応えられるだけである。

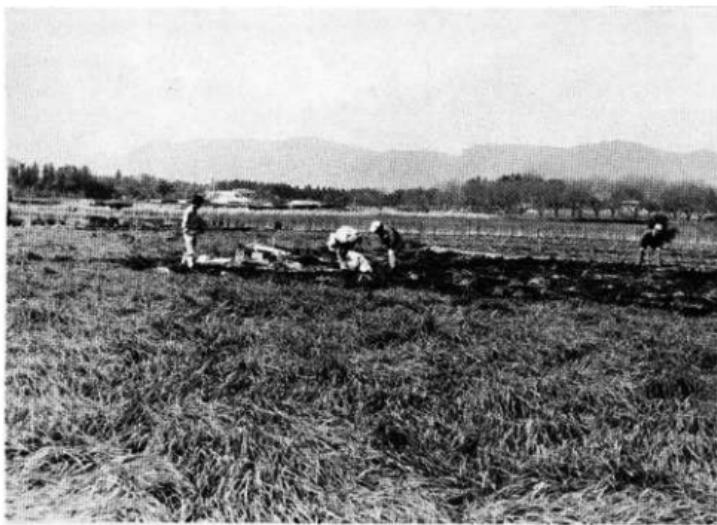
（北郷奈道）

### 註

- (1) 「小木原遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1) 宮崎県教育委員会(昭和47年)
- (2) 「久見追遺跡」註(1)と同じ
- (3) 「馬頭遺跡」註(1)と同じ
- (4) 「灰塚遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(2) 宮崎県教育委員会(昭和48年)
- (5) 木崎原 操「門田古墳群」ほか『えびの』第4号 えびの市史談会(昭和47年)
- (6) 「六野原古墳調査報告」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第13編 宮崎県(昭和19年)
- (7) 「大荻遺跡」(1)『頬ノノロ地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』宮崎県教育委員会(昭和49年)
- (8) 岩永哲夫「平松地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集 宮崎県教育委員会(昭和53年)
- (9) 出土副葬品の行えは現在不明である。
- (10) 現地に現在残っている唯一の墳丘をもつ地下式古墳に立ててある2基の説明板によれば、指定年月日が1基では昭和8年12月5日、もう1基では昭和19年12月5日としてあり、又指定基数も1・3基となっている。昭和8年の指定告示では1・2基が指定されており、昭和19年に追加指定として1基加わったものと当初考えていたが、指定告示を調べた結果昭和19年には真幸で指定されている地下式古墳ではなく、おそらく何らかの行き違いによる誤記と考えられる。

- 01 第3表-3の文献参照
- 02 田中 茂「えびの市小木原地下式横穴3号出土品について」『研究紀要』第2 宮崎県総合博物館（昭和49年） 61ページ
- 03 D字形をなし、小野山節氏の編年による第Ⅲ期に当たるものと思われる。  
小野山節「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』第8巻（昭和34年）
- 04 「波状列点文とは、二条の点線文とそれらにはさまれた一条の波状の点線文、点で構成された文様のことである。」（小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」（下）『考古学研究』第21巻第2号）
- 05 小林謙一「地下式横穴の甲冑と大和政権」『日向の古墳展』 宮崎県総合博物館（昭和54年）
- 06 小林謙一氏の御教示による。
- 07 後藤守一「上古時代鉄錆の年代研究」『日本古代文化研究』（昭和17年）
- 08 西川 宏「武器」『日本の考古学』古墳時代<下> 257ページ
- 09 註(4)、80ページ
- 10 福尾正彦氏の最近の一連の論考も、そうした方向の中で貴重な成果を上げている。福尾正彦「地下式横穴に関する一考察」『竹並遺跡』（昭和54年），同「地下式横穴研究ノート(1)」『宮崎考古』第4号（昭和53年）
- 11 「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集 宮崎県教育委員会（昭和52年）
- 12 茂山 譲・面高哲郎の両氏も、ほぼ同様の資料操作の結果を導かれている。





(1) 発掘前の近景（東よりみる）



(2) 発掘後の近景（矢印、平松古墳、西よりみる）

図版2



←閉塞の状態

→羨道と玄室（柵状施設がみえる）





(1) 2号人骨と副葬品の状態



(2) 1号人骨と副葬品の状態



平松地下式古墳昭 5-4-1 号副葬品

VII 平松地下式古墳発掘調査（昭54-2号～4号）

えびの市大字島内字平松1135

県埋蔵文化財調査員 北郷泰道  
県文化課主任主事 岩永哲夫

## 本 文 目 次

I 所在地 .....	1 8 4
II 発見の契機と調査に至る経過 .....	1 8 4
III 調査の結果 .....	1 8 5
1 昭54-2号 .....	1 8 5
2 昭54-3号 .....	1 8 8
3 昭54-4号 .....	1 4 0
IV まとめ .....	1 4 2

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡所在地 .....	1 8 4
第2図 昭54-2号出土副葬品実測図 .....	1 8 6
第3図 昭54-2号出土副葬品(金銅製金具)実測図 .....	1 8 8
第4図 昭54-2号地下式古墳実測図 .....	1 8 9
第5図 昭54-3号出土副葬品実測図 .....	1 4 0
第6図 昭54-3号地下式古墳実測図 .....	1 4 1
第7図 昭54-4号出土副葬品実測図 .....	1 4 2
第8図 昭54-4号地下式古墳実測図 .....	1 4 3
第9図 昭54-3, 4号位置図 .....	1 4 4

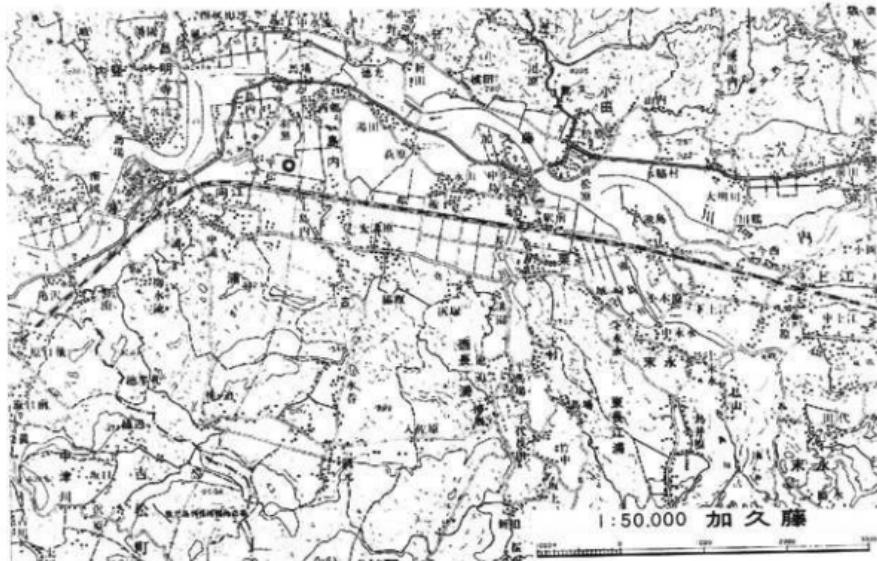
## 図 版 目 次

図版1 平松地下式古墳昭54-1・2・3・4号の位置 .....	1 4 7
図版2 (1)昭54-2号陥没穴 .....	1 4 8
(2)昭54-2号発掘調査風景 .....	1 4 8
図版3 (1)昭54-2号閉塞石(玄室よりみる) .....	1 4 9
(2)昭54-2号閉塞石(壁面よりみる) .....	1 4 9
図版4 (1)昭54-2号副葬品の状態(劍) .....	1 5 0

(2) 昭 5 4 - 2 号副葬品の状態(金銅製金具・鉄鎌)	1 5 0
図版 5 (1) 昭 5 4 - 3 号堅壇上部閉塞の閉塞石	1 5 1
(2) 昭 5 4 - 3 号堅壇入口	1 5 1
図版 6 (1) 昭 5 4 - 3 号副葬品の状態(劍および鉄鎌)	1 5 2
(2) 昭 5 4 - 3 号人骨の状態	1 5 2
図版 7 (1) 昭 5 4 - 4 号堅壇上部閉塞の閉塞石	1 5 3
(2) 昭 5 4 - 3 号堅壇部壁面の成形と鉄鎌	1 5 3
図版 8 (1) 昭 5 4 - 2 号出土副葬品	1 5 4
(2) 昭 5 4 - 3 号出土副葬品	1 5 4
図版 9 (出) 昭 5 4 - 2 号出土金銅製金具	1 5 5
(出) 金銅製金具波状列点文拡大写真	1 5 5
(出) 昭 5 4 - 4 号出土副葬品	1 5 5

## I 所 在 地 (第1図)

今回調査の対象となった三基の地下式古墳は、えびの市京町の東約2kmの大字島内字平松に所在する。標高285mのこの台地は古くから地下式古墳の群集地として知られている。同地は、台地の東部の宇杉ノ原と字平松を含む地区に所在する円墳。地下式古墳の群集から「真幸古墳群」と汎称される。古くは杉ノ原の地下式古墳から銅角付貫、横矧板鉢留短甲が出土しており、その後昭和41年8月栗原文藏氏によって調査された地下式古墳からも三角板鉢留短甲などが出土しており、今日では12基を下らない数の地下式古墳が確認されている。



第1図 遺跡所在地(○印)

## II 発見の契機と調査に至る経過

昭和54年4月3日、えびの市の依頼により同地の地下式古墳1基について調査を行なった。その折、堅壙上部閉塞の蓋石を北西の方向約180mの地点で確認していたが、まだ崩壊のおそれのない事、時間的制約などにより、同地下式古墳の調査には踏み切らなかった。その後、今回昭54-2号と称することになった地下式古墳の天井部が陥没したとのえびの市教育委員会の県教育委員会への連絡があり、

協議の結果先の地下式古墳も合わせ2基についての調査を同年9月6日から8日までの3日間行なうことになった。又、調査前の周辺の探索で今回昭54-3号と称することになった地下式古墳が発見され、すでに天井部崩壊がはじまっていることから、合計3基を調査対象とした。調査は初日岩永哲夫氏の援助を受け、またえびの市教育委員会の方々の力添えを受け、筆者が担当した。

### III 調査の結果

本報告では4月8日に発掘調査した地下式古墳を「平松地下式古墳(昭54-1号)」とし、本報告の三基も通し番号で昭54-2号、昭54-3号、昭54-4号とする。

#### 1. 昭54-2号(大字島内字平松1135-210)

この地下式古墳は、今回の発掘調査の契機となった天井部の陥没したものである。発掘は陥没した玄室天井部を開口して行なった。

玄室は第1オレンジ(赤ホヤ)層を天井部にし、砂礫層を振り込んで床面としているため、砂礫の崩壊により床面の平面プランはやや原形をそのまま保っているといい難い。玄室の構造は陥没した天井部の土塊などによる復元から、半入型寄棟造りをなす。堅壁部分は半分が農道下に在るため、半分のみ発掘するにとどめたが、二枚の板石による奥門閉塞である。

地下式古墳の主軸はほぼ南北にあり、人骨は天井部陥没によりその原形をとどめなかつたが、奥壁に寄せて二体が埋葬されていたものと思われる。

玄室の規模は、長軸231cm・短軸215cmで、天井の高さは不明である。また、堅壁は表土より140cm程で床面になるが、地下式古墳築造時は現表土より17cm程下がる黒褐色土層から掘り込まれたものと考えられる。盛上(墳丘)の有無は上層断面の観察からは確められなかつた。

副葬品は奥壁よりの人骨の頭部左に刀子・鉤と思われる骨材柄の鉄片、胴部付近右に劍・脚部付近左に一塊りとなり金銅製金具・鉄鎌・劍の残欠があり、手前の人骨の頭部左に刀子が副葬されていた(第4図)。

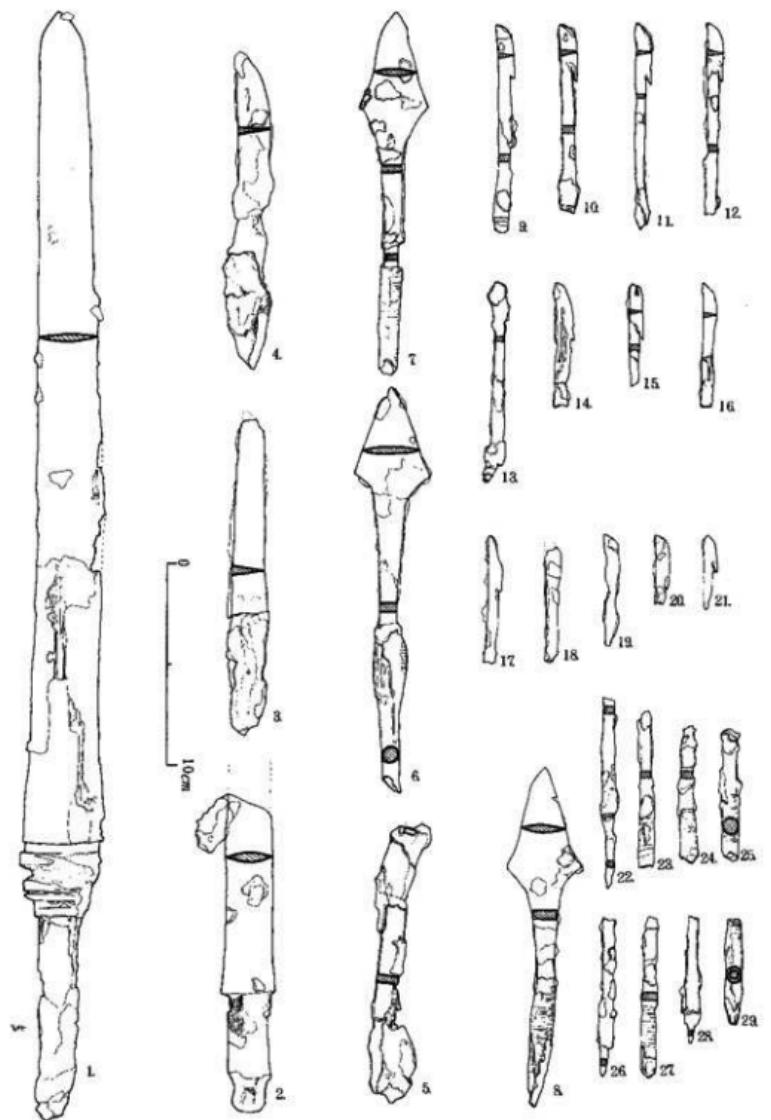
##### (1) 剣(第2図1)

全長54.9cm、柄長13.8cmを計る。身幅は開寄りで3.6cm、中程で3.2cm、締寄りで2.3cmである。劍の厚さは0.5cmで鎌は通っていない。

鞘部は一部を残すのみとなっているが、柄元装具の鹿角装には直弧文様の一部をかすかに認めることが出来る。

##### (2) 剑残欠(第2図2)

鉄鎌などと一塊りの中に混入していたもので、柄部を含む一部しか確認されなかつた。身幅は2.7cmを最大幅とし、(1)に比し短劍に近いものであったと思える。劍の厚さは0.6cmで、同じく鎌は通っていない。



第2図 昭54-2号出土器物実測図

### (3) 刀子(第2図3・4)

3は全長15.5cm、柄長6.1cmを計り、鉤は破損している。身長9.4cm、身幅1.7cm、棟幅0.4cmである。柄には骨材を使用している。

4は全長15.7cm、柄長5.7cmを計り破損が著しい。身長1.0cm、身幅1.6cm、棟幅0.4cmである。

3と同様柄には骨材を用いている。

### (4) 鋼様鉄器(第2図5)

幅1.1cm、厚さ0.4cmの棒状の鉄器に骨材の柄をもつもので、鉗と思われるが、刃部を失っているため詳細は明確ではない。これが鉗とすれば、栗原文藏氏の調査された島之内地下式古墳からも同様の骨材を柄に用いた鉗が出土している。

### (5) 鉄鎌(第2図6～29)

鉄鎌は半根鎌3本に細根鎌が鎌先部で數えて13本の合計16本出土している。しかし、とくに細根鎌は鎌首が著しく原形に復元するのは困難であった。

6・7・8は一応いわゆる変形半頭斧箭式に分類出来るものであるが、7・8は6に比し長二等辺三角形に近く茎への線もゆるやかである。6の最大幅は8.7cmで厚さは0.4cm、現長では20.1cmで矢柄部分までの長さは11.7cmである。7の最大幅は8.3cmで厚さは0.4cm、現長では17.9cmで矢柄部分までの反さは11.4cmである。8の最大幅は8.7cmで厚さは8.7cmで厚さは0.4cm、現長では16.9cmで矢柄部分までの長さは11.1cmである。

9から29までは図示し得なかった残欠も含め、いわゆる螺旋波瀬抜片刃箭式となるものである。身の最大幅は0.8cmを前後するもので厚さは0.2cmを計り、茎部幅は0.6cmを前後するものである。

### (6) 金銅製金具(鞆金具)

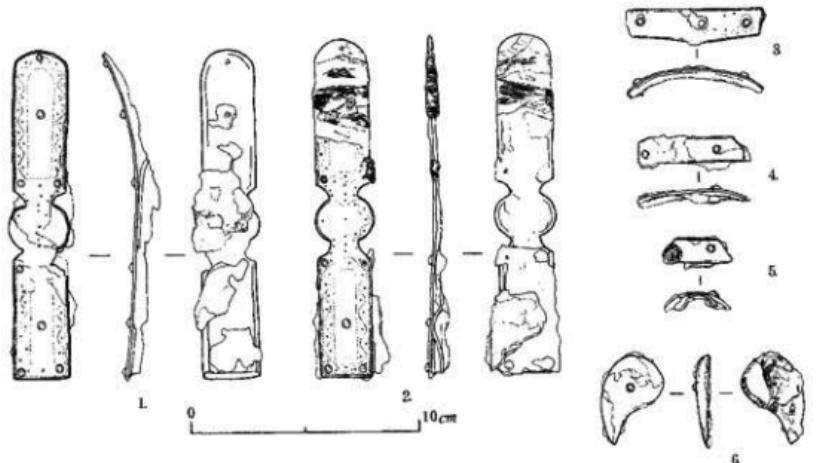
1・2はそれぞれ金で塗金してあり、波状列点文をタガネ彫している。隅丸長方形部には4つの筋で長方形部には五つの筋で皮革質のものにとめたと思われる。軸は2.3cm、厚さは0.1cm程度である。

3は縁金具に当たるものと考えられ、1・2同様タガネ彫で波状列点文を施している。軸は最大幅で1.5cm、現最小幅で1.2cmを計る。裏面には同じく皮革質のものが付着している。

4・5も縁金具に相当するものと思われるが、これには波状列点文はみられない。軸はいずれも1cmである。

6は勾玉状の形をしたもので、中央を鋲によってとめたものである。長軸長は3.9cm、短軸長は2.6cmである。

これら金銅製金具については詳しく述べることにしている。



第3図 昭54-2号出土蔵品(金銅製金具)実測図

## 2. 昭54-3号(大字島内字平松1135-269)

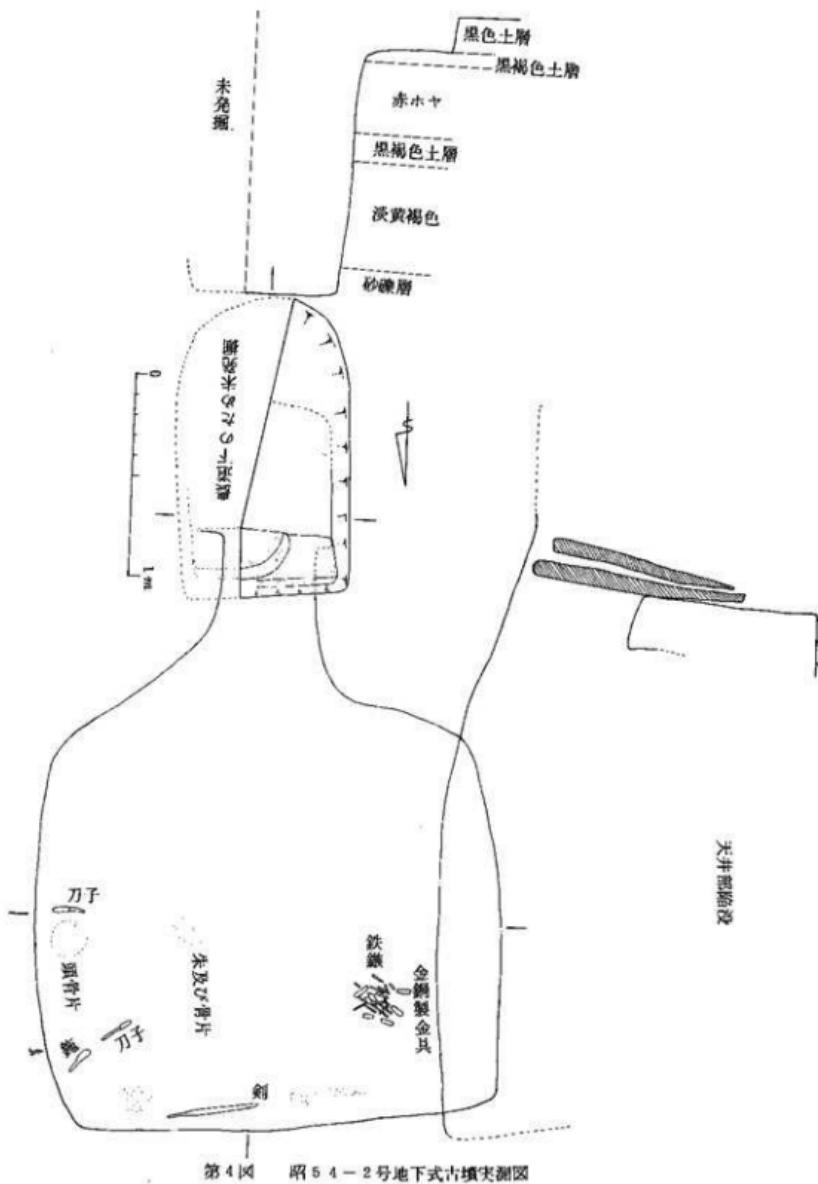
8号・4号の両地下式古墳は1m程の間隔で近接して築造されていた。(第9図)

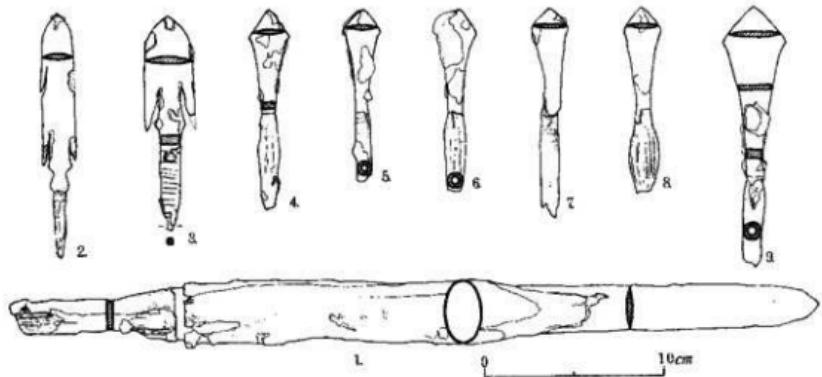
この地下式古墳は蓋石を確認し、周囲を精査した段階で周辺に亀裂が生じはじめていたため、蓋石による加重をとりのぞき凹状の把握につとめた。構造は堅壁上部板石閉室で、平入型ドーム形をなすものである。蓋石には一枚板の板石を使用している。

地下式古墳の主軸はS 6°Wを示している。人骨は3体あったものと思われるが、奥壁よりの人骨は奥壁の倒落により骨粉と化していた。

玄室の規模は、長軸17.8cm・短軸12.5cm・天井高7.5cmである。堅壁入口の径は4.5cmで、底部径は10.3cm。堅壁の掘り込みは14.5cmで玄室の床面へと続く。

副葬品は玄室入口の北側に鉄鎌が1本、奥壁に寄せて角1振、鉄鎌7本があった。また玄室入口に近い人骨の頭蓋骨にはベンガラが付着していた。(第6図)





第5図 昭54-3号出土副葬品実測図

(1) 剣（第5図1）

全長45.2cm、柄長3.3cmを計る。身幅は峰寄りで2.4cm、厚さは0.4cmで鍔は通っていない。柄部はかなり良く残っており、それを含めた幅は3.6cm、厚さは2.1cmである。柄には骨材を用いている。

(2) 鐵鎗（第5図2～9）

2は二段逆刺のある異形脇抉柳葉式の鎗で、現長13.5cm・矢柄部分までの長さ1.0cm・最大幅1.9cm・厚さ0.3cmを計る。

3は一段逆刺のみの脇抉柳葉式の鎗で、玄室入口北側に置かれていたもので、これによって堅壙の壁面を成形している。現長11.9cm・矢柄部分までの長さ2.5cm・最大幅2.8cm・厚さ0.5cmを計る。

4～8は小型の変形主頭斧箭式で、ほぼ画一的な規格をもっている。最大幅2.1cm・厚さ0.3cm・矢柄部分までの長さは5.7cmである。矢柄部分の径は1cmである。

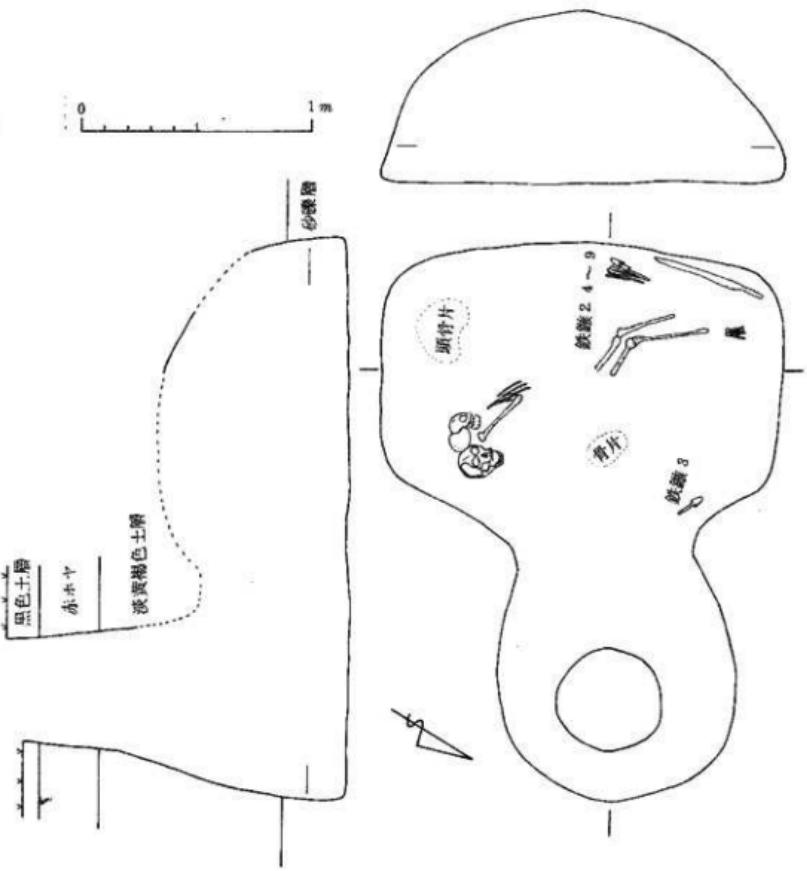
9は4～8に比し大きい変形主頭斧箭式の鎗で、最大幅3.4cm・厚さ0.4cm・現長14.5cm・矢柄部分までの長さ9.7cmそれぞれ計る。

### 3. 昭54-4号（大字島内字平松1135-269）

この地下式古墳は4月3日に確認していたものである。

構造は3号と同様、堅壙上部板石閉塞で平入型ドーム形をなすものである。蓋石には四枚の板石を組み合わせて使用していた。

地下式古墳の主軸はS48°Eを示している。人骨は2体とともに良好に残っていた。第8図にみるよう人に骨の脚部がO型に広がっているが、これは玄室の狭小から脚を折り曲げて膝を立てた状態で埋葬された結果と考えられる。



第6図 昭5.4-3号地下式古墳実測図

玄室の規模は、長軸  $189\text{cm}$ ・短軸  $119\text{cm}$ ・天井高  $71\text{cm}$ である。堅壙入口の径は  $44\text{cm}$ で、底部径は  $79\text{cm}$  堅壙の掘り込みは  $134\text{cm}$ で玄室の床面へと続く。

副葬品は玄室入口の人骨の頭骨下に 2 本の鉄鎌が認められたのみである。(第 8 図)

#### (1) 鉄鎌(第 7 図 1・2)

いずれも変形主頭斧鎌式に相当するものであるが 2 は 1 に比し長二等辺三角形に近いものである。

1 は現長で  $237\text{cm}$ で最も良く矢柄部分を残したものであった。その矢柄部分までの長さ  $102\text{cm}$ 、最大幅  $33\text{cm}$ 、厚さ  $0.4\text{cm}$ 、茎幅  $0.8\text{cm}$ 、厚さ  $0.5\text{cm}$ 、矢柄の径  $1\text{cm}$ を計る。

2 は現長で  $165\text{cm}$ 、矢柄部分までの長さ  $109\text{cm}$ 、最大幅  $36\text{cm}$ 、厚さ  $0.4\text{cm}$ 、茎幅  $1\text{cm}$ 、厚さ  $0.4\text{cm}$ 、矢柄の径  $1\text{cm}$ をそれぞれ計る。

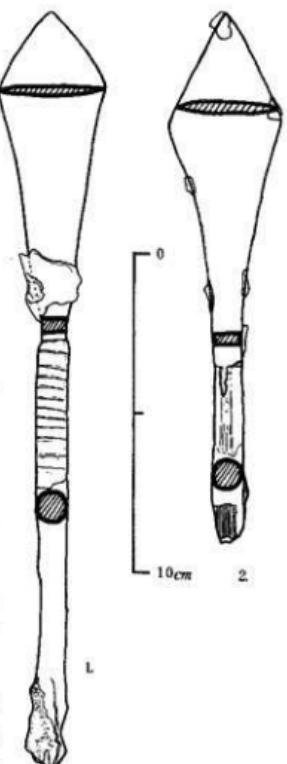
## IV まとめ

今回の調査は少なからず、南九州地域に特異な分布を示す地下式古墳の理解のために有効な・そして興味ある成果を上げることが出来た。以下、その諸点についてふれてみたい。

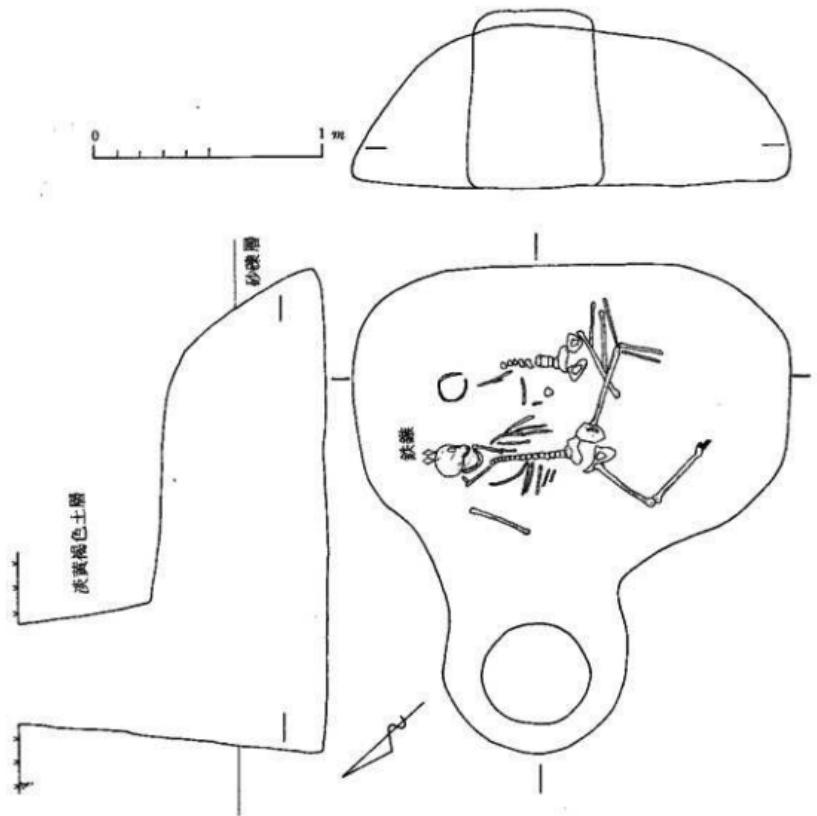
#### (1) 金銅製金具(鈴金具)

特記すべきは、これまで地下式古墳文化圏はもとより、全国的にも余り類例をみない鈴金具が出土したことである。もとより、これを鈴金具として確証付けるにはいま一つ明瞭でない部分があるし、全国的な類別の中でも未だ定まった説を持たない遺物だけに今後に課題は残されている。

円形状の部分をはさみ隅丸長方形と長方形状の形状により形成される第 8 図 1・2 と同様の遺物は、これまで岡山県天狗山古墳(3)、福岡県月ノ岡古墳(4)、奈良県珠城山古墳(5)、福岡県沖ノ島 7 号遺跡(6)から出土している。しかし、この内天狗山古墳、月ノ岡古墳出土のものはいずれも鉄具を具備しており、銅具が具備していたとは考えられない本 2 号地下式古墳出土のものとは異なる。又、第 8 図 3・4・5 と同様の遺物は、先の冲ノ島遺跡、珠城山古墳、島根県四ツ塚第 1・第 13 号墳(7)、和歌山県大谷古墳などから出土している。これらの中で、この種の遺物を観るいは胡錠金具とみるものは冲ノ島 7 号遺跡、四ツ塚第 1・第 13 号墳、月ノ岡古墳などで、他は珠城山古墳においては馬具類の金具として、天狗山古墳においてはここに上げた幾つかの類例を引きながらその断定を避け、大谷古墳では冠の縁かもしれないという推測を述べるにとどめている。



第 7 図 昭 54-4 号出土副葬品  
実測図

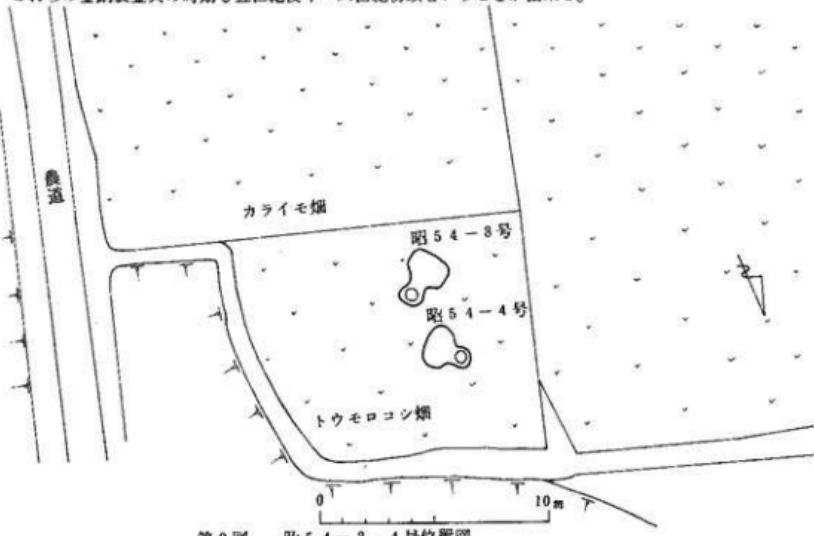


第8圖 昭54-4号地下式古墳実測図

本遺物については、沖ノ島、四ツ塚などで鉄錐類と混在して出土していることから頬あるいは胡錐金具とみたように、本例でも鉄錐と混在して出土していることから頬あるいは胡錐金具とみておきたい。

第3図1・2の金具は四辺を内側へ折り返し、裏面には皮革質の遺物を付着させている。その断面の観察においては、そうした皮革質のものの一つの単位と思われるものを認めることが出来る。しかし、2の金具の隅丸長方形部に巻かれた平織のヒモのもつ役割に疑問が残るし、剝金具とみてもどの部位にどのように役割を果した金具であるのか明瞭ではない。また、第3図6の勾玉状金具は裏面に平織のヒモの残痕と思われるものを行着させており、中央の筋の跡が第3図2の平織のヒモで巻かれた部分に残っていることから、2の金具の隅丸長方形部の中央の筋の部分にとめられた金具との見方も出来るが、この金具の役割もまた明瞭ではない。

ともあれ第3図1・2・3の金具に施された波状列点文は、県下の地下式古墳出土のものでは西都原(9)地下式古墳4号に副葬された横矧板紙留短甲の鉄地金銅張方形蝶番金具にも見出しが出来、あるいは類似の遺物を出土した先に上げた各地の古墳の時期が五世紀後半～六世紀初頭にあたることなどからこれらの金銅製金具の時期も五世紀後半～六世紀初頭ということが出来る。



第9図 昭54-3, 4号位置図

#### (2) 被葬者の状態

昭54-4号に副葬された人骨は、いわばO型に脚をひらく形となっており、奥壁よりの人骨の脚部もO型にはひらいていなかったが、膝を立てた両足がともに奥壁方向に向かって倒れた格好になっていた。このことは被葬された人体が膝を立てた状態であったことを示しているように思える。これは地下式古墳の玄室の狭小さによるものであるかもしれないが、被葬者の埋葬姿勢とでもいうべきものに注意

を向ける必要性を感じさせるものであった。

### (3) 壁面あるいは玄室壁面天井部の成形

昭54-3号の壁面は玄室入口部に副葬されていた鐵錠によって成形されている。(図版7-2)  
換言すれば埋葬に際し壁面を成形した鐵錠を、手軽な入口部に置き、そのまま埋葬を完了したこと  
を示している。大蔵地下式古墳36号においては、玄室壁面の成形痕に副葬された手斧、鍔先の形状が合  
致し、墓室を作った道具がそのまま副葬された事例を端的にもの語っていたが、本3号もその一例とし  
て考えられる。

### (4) 地下式古墳の位置関係

<sup>13)</sup>

これまで島内地下式古墳群においては本報告分を含め12基が正式な発掘、あるいはその出土品が把  
握されている。しかし、およそ50年の間にそれらの発見が断続的に行なわれたため、各々の地下式  
古墳の位置関係は記録(因面)として残されていない。今回、幸いに3号と4号は隣接して築造され  
いたため一応因面にとどめることが出来た。(第9図)

地下式古墳一基一基の方位・位置は、各々を個別に見る限り恣意性の中に在るといえる。しかし、地  
下式古墳の位置関係・方位性の問題は、二・三基を単位とした集合の中に認めていく必要がある。本3  
・4号は直交する形で築造されているが、これらがどのような単位の設定の中に定位位置を与えられるか  
は周辺に出土するであろう地下式古墳の蓄積の中で果たされる筈である。

### (5) 地下式古墳の編年

本報告では、堅壙上部板石閉塞のタイプと淡門部板石閉塞のタイプという、えびの地域特有の二つの  
タイプの地下式古墳をあつかうことになった。このタイプの違いが果して年代的先後関係にあるもので  
あるのか、その系統の違い、あるいは被葬者の違い(ヒエラルキーの問題も含め)によるものなのか、  
未だ明確ではない。先述した如く、昭54-2号の淡門部板石閉塞の地下式古墳は金銅製金具の副葬か  
ら五世紀末へ六世紀初頭と考えられるが、三角板新留短甲を出土した栗原文藏氏調査分の地下式古墳は  
堅壙上部板石閉塞のタイプであり、副葬品の直接さし示す年代観からは同時期的な余り差のない時期の  
ものと考えられるものである。今回の3・4号は、玄室天井部を屋根形につくらずドーム形のものであ  
り、その形状上からは幾分後期のものと考えられるが、その詳細な年代観に関する記述は昭54-1号  
地下式古墳の報告にゆずりたい。

最後に、金銅製金具について近藤義郎先生から資料の提供および御教示を得たほか、茂山謙氏を介し  
て小林謙一氏からの資料の提供および御教示を得たことを記して感謝申し上げます。

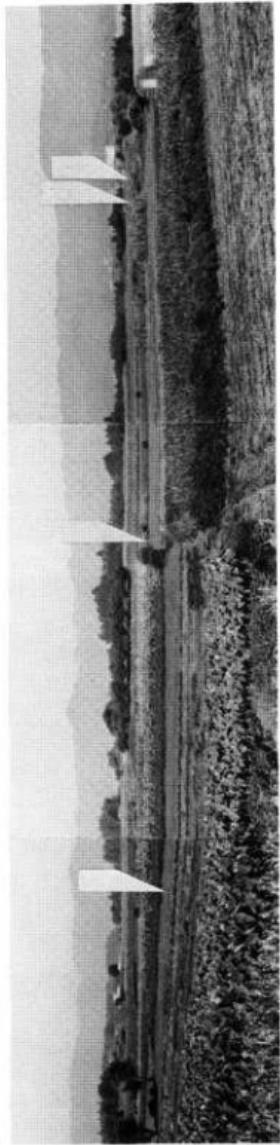
(北郷泰道)

#### （註）

(1) 栗原文藏「えびの町真幸・島之内地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第12報、宮崎県  
教育委員会(昭42年)

(2) 4月3日分調査の地下式古墳を「昭54-1号」とし、本報告書別項において報告する。

- (3) 村井富雄「岡山縣天狗山古墳出土の遺物」『ミュージアム』第250号(昭和47年)12ページ
- (4) 金元龍著・西谷正訳『韓國考古学概論』 125ページ
- 野寺 健・神印惣藏「公州宗山里古墳調査報告」昭和2年度古墳調査報告第2冊(昭和10年)  
11ページ
- (5) 小島俊次・伊達宗泰『珠城山古墳』(昭和31年) 22ページ
- (6) 『沖ノ島』(昭和33年)
- (7) 近藤義郎「蒜山原」岡山大学医学部第2解剖学教室人類学考古学研究業績第2冊(昭和29年)  
54ページ・131ページ
- (8) 橋口隆康・西谷真治・小野山節『大谷古墳』(昭和34年) 95ページ
- (9) 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』43巻4号(昭和38年)
- (10) 小林謙一「地下式横穴の甲冑と大和政權」『日向の古墳展』宮崎県総合博物館(昭和54年)
- ⑩ 小林謙一氏の御教示による。
- ⑪ 茂山 譲「大萩地下式横穴調査報告」本報告書
- ⑫ この地域は昭和8年、地下式古墳12基について「真幸村古墳」として県指定がしてある。ここでは字平松・字杉ノ原の二字を含む大字名「島内」をとり、島内地下式古墳群と呼称することにする。



昭54-2号

昭54-1号

昭54-3号  
昭54-4号

平松地下式古墳群54-1, 2, 3, 4号の位置



(1) 昭54-2号陷没穴



(2) 昭54-2号発掘調査風景



(1) 昭54-2号閉塞石(玄室よりみる)



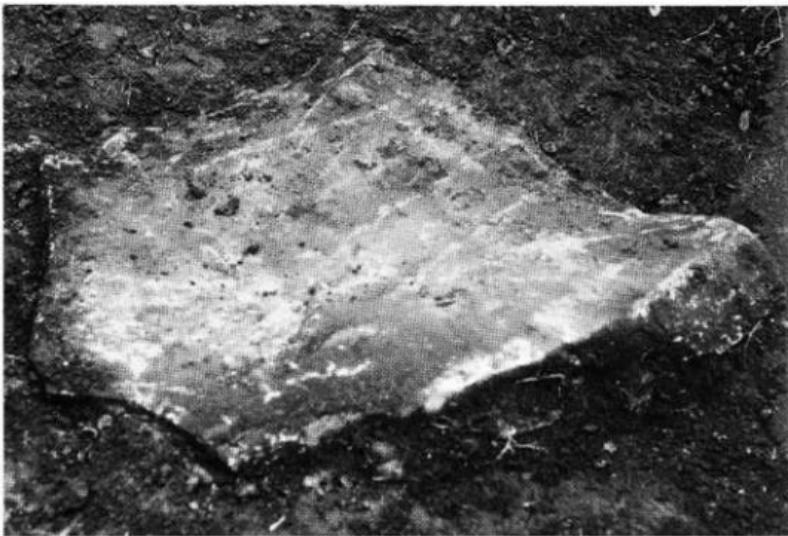
(2) 昭54-2号閉塞石(堅壙よりみる)



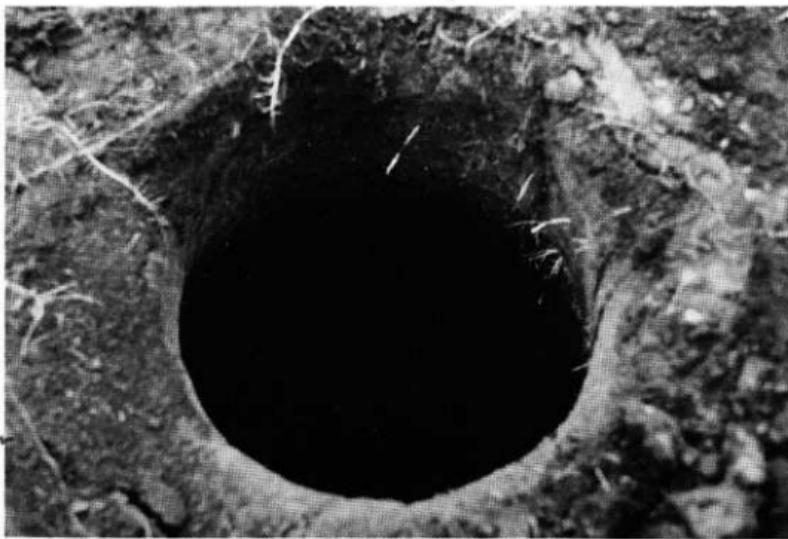
(1) 昭54-2号副葬品の状態(剣)



(2) 昭54-2号副葬品の状態(金銅製金具・鉄鐵)



(1) 昭54-3号堅壙上部閉塞の閉塞石



(2) 昭54-3号堅壙入口



(1) 昭54-3号副葬品の状態(剣および鉄畿)



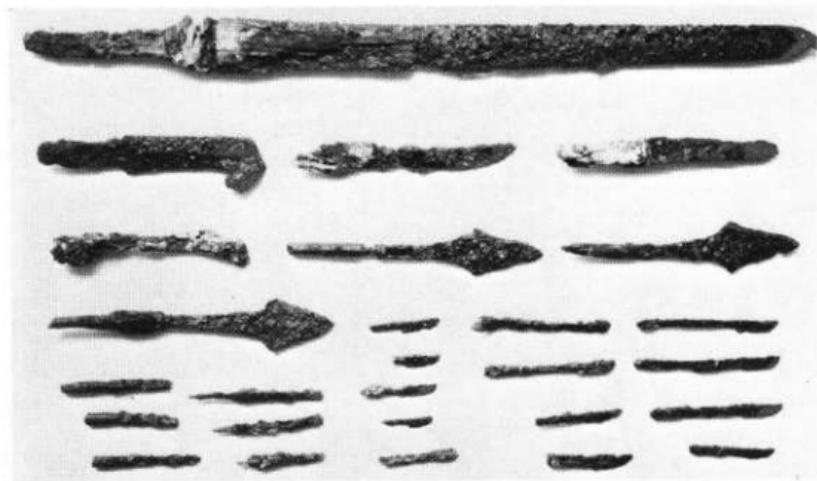
(2) 昭54-3号人骨の状態



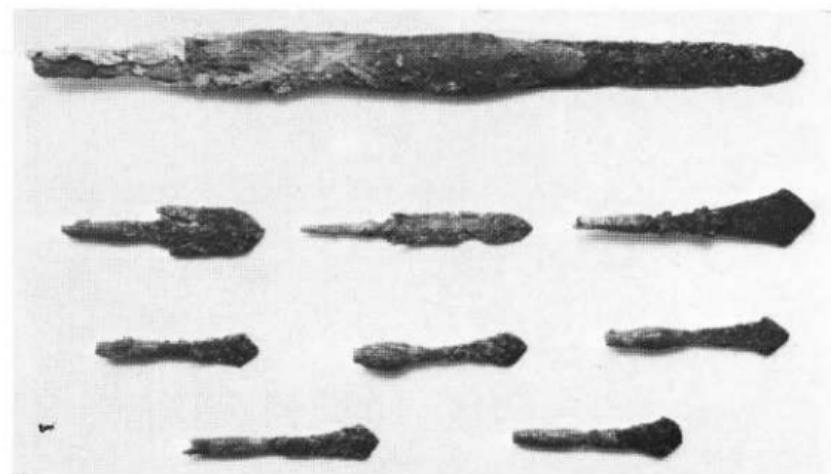
(1) 昭54-4号堅壙上部閉塞の閉塞石



(2) 昭54-3号堅壙部壁面の成形と鉄鍼



(1) 昭 5 4 - 2 号出土副葬品



(2) 昭 5 4 - 8 号出土副葬品



(上)

昭 5 1 4 号出土副葬品



(左)

昭 5 1 2 号出土金銅製金具



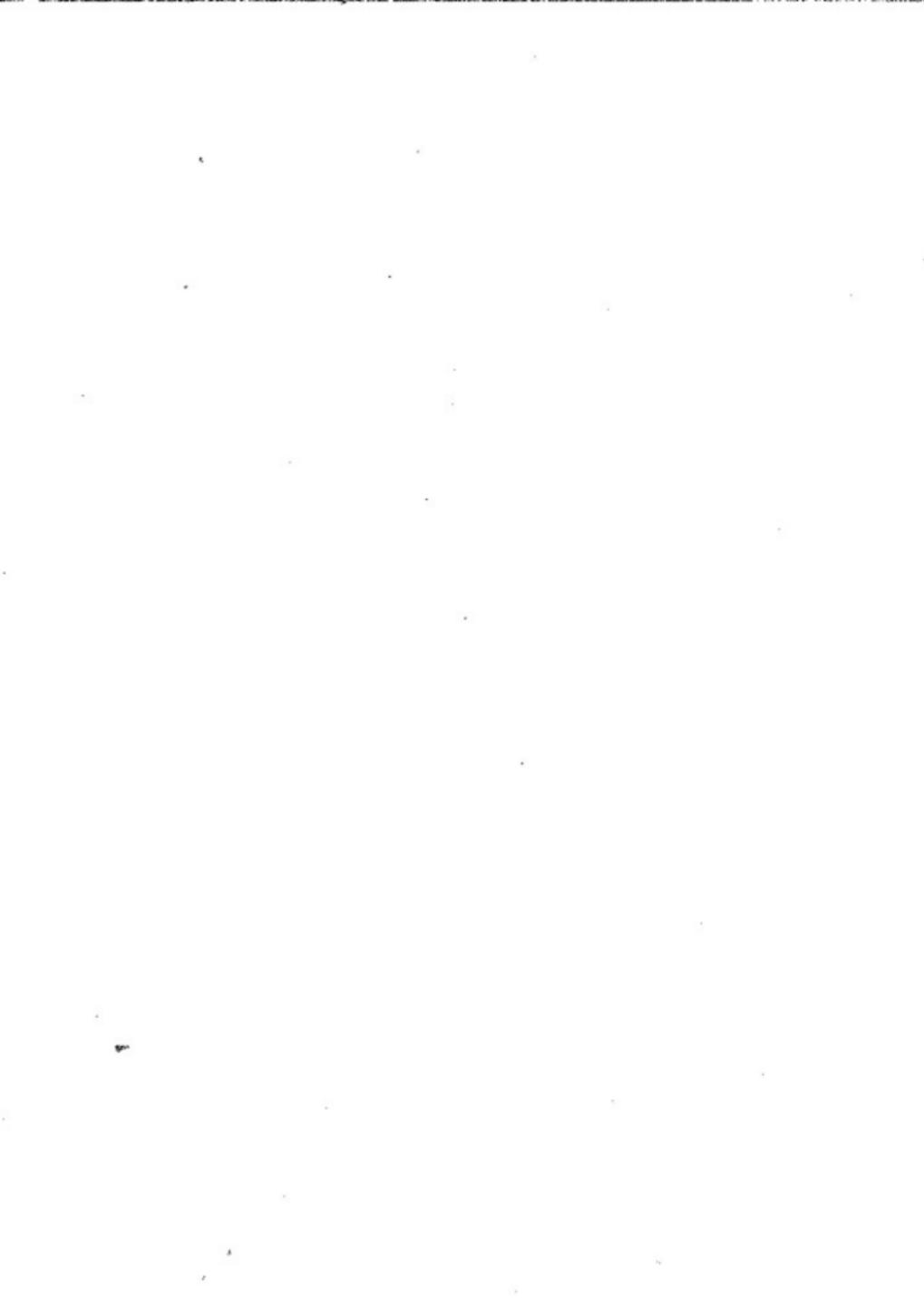


(付)

## 昭和54年度 埋蔵文化財発掘調査一覧

(昭55.1末現在)

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考	
1	日守地下式古墳 54-1, 2号	西播磨郡高岡町大字後川内1の119	54.5.8 ～5.9	県教委	岩永 哲夫	刀子輪 貝の骨 人骨	1 1 3	本号掲載
2	日守地下式古墳 54-3, 4号	〃	54.6.7 ～5.9	〃	茂山 譲 面高 哲郎	剣 刀 鐵鑑	1 1 4	〃
3	上別府遺跡	児湯郡高鍋町 大字持田上別府 4,710 4,712	54.8.9 ～8.29	〃	日高 田中 田ノ上 正晴 熊雄 哲 良典 永友 良康 隆夫 渡辺 永 須 岩 泰 小森 達郎	居 住 器 器 土 築 石 の 他	9基	別報告
4	平松地下式古墳 54-2, 3, 4号	えびの市大字島内 平松1,135	54.9.6 ～9.8	〃	北郷 岩永 泰道 哲夫	剣 鉄 金 銅 製 金 具 骨	1 1 3	本号掲載
5	平松地下式古墳 54-1号	えびの市大字島内 平松1,135	54.4.8	えびの市 教	北郷 泰道	直 劍 鉄 人	2 1 7 3	〃
6	宗仙寺地下式古墳 54-1号	東諸県郡国富町 大字本庄4,056	54.5.1 ～5.2	国富 町 教	野間 重孝	くわ 先 骨	1 2	
7	宗仙寺地下式古墳 54-2号	〃	54.5.23 ～5.24	〃	〃	直 彷 制 管 丸 鎧 先 人 骨		
8	若宮田遺跡	宮崎郡清武町大字 木原字若宮田 1094-2 1076	54.6.20 ～6.30	清武 町 教	日高 岩永 正晴 哲夫	楕 石 石 石 土 器 斧 鍛 鐵 器 他		
9	高野原地下式古墳	宮崎郡田野町 高野原申13,124-1	54.9.4	田野 町 教	日高 正晴	剣		
10	浄土江遺跡	宮崎市浄土江町 109外	54.10.11 ～12.6	宮崎 市 教	野間 重孝	住 居 土 築 石 器 器 石 凹 鑿 石 支 脚	10基	
11	樺山箱式石棺	延岡市桜ヶ丘 1丁目7494-1	54.11.5	延岡 市 教	石川恒太郎	人骨		
12	辻遺跡	宮崎郡清武町大字 木原字辻780外	54.12.10 ～12.27	清武 町 教	日高 北郷 長津 正晴 泰道 宗重	楕 文 土 器 斧 鍛 鐵 器 他		



宮崎県文化財調査報告書  
第 22 集

発 行 昭和55年8月31日  
宮崎県教育委員会  
編 集 宮崎県教育庁文化課